

丹波酒造出稼ぎ者の現況

大 西 正 曹

目 次

- I 序
- II 酒造出稼ぎの歴史
- III 調査地および調査対象の概要
- IV 酒造出稼ぎ者の出稼ぎ要因の分析
 - 1 酒造出稼ぎ農家の長男の職業選択の要因
 - 2 農業従事の長男の酒造出稼ぎ要因
- V 酒造出稼ぎの農家におよぼす影響

I 序

出稼ぎは、一定期間生活本拠地から離れて、賃労働者となることである。その期間は、永久的でなく、かなりの長期間にわたる場合もある。多くは、季節的であり、回帰が必ず行なわれる。⁽¹⁾そして、季節出稼ぎは、従来、特定の期間農業のできない地方のものであり、主に零細農業に見られる現象であつた。しかし、最近では、それは出稼ぎ地域、出稼ぎ先の業種、農業経営規模のすべてにわたつて拡大する傾向がある。冬期間、働く機会のない地域からの、非農業部門への出稼ぎは、1つの慣習になつて、伝統的な出稼ぎ地帯を形成している。この例として「酒造出稼ぎ」がある。⁽²⁾酒造産業そのものは、日本の産業構造が、依然として、手工業的前近代的な産業が中心であつた明治初期においては、日本における主な産業の1つであつた。そして、日本産業を近代化するのに貢献した。しかし現在において、酒造業は、ごく一部の酒造業者を除いて、ほとんどが、手工業的な前近代的小規模経営を行なっている。⁽³⁾最近の都市および、その近郊の重化学工業の人手不足は、これら酒造出稼ぎの母体である農業の経営主や長男までも、これらの産業へ吸上げている。そのために、企業側にとつて、酒造出稼ぎ者の確保は、年々難しくなっている。特に、3役（杜氏、大師、頭）以外の下働きをする若手の出稼ぎ者は他産業へ流出し、すでに脱農しているために、現役を退職した老令者が再び下働きとして、若手出稼ぎ者の代りに出稼ぎに出る。そのために、出稼ぎ者の年令が高令化している。⁽⁴⁾農家の長男が兼業を考える場合、肉体労働が多く、作業時間が不規則で休みや帰省が少く、また半年間も家族と別れて生活する酒造出稼ぎよりも、自宅から通勤出来る兼業を強く希望する者が多く、そのために、酒造出稼ぎに従事する兼業農家は、しだいに自然消滅していく傾向にある。そして受入側の企業では、これに対処するために、酒造労働の機械化により人手不足をカバーするか、あるいは四季醸造により、通勤形態に、雇用条件を変える必要にせまられている。⁽⁵⁾このような状況にある酒造出稼ぎと、一般の出稼ぎについての調査研究は、農業経済学の立場から多くの研究がなされている。しかしながら酒造出稼ぎ者の意識をもとにして、酒造出稼要因を分析研究したものは、過去に余り例を見ない。そこで、昭和41年度文部省試験研究費による「伝統産業における技術改良の普及と、過程要因、その経営組織におよぼす影響に関する調査研究」（研究代表者、甲南大学井森陸平教授）の一環として、昭和41年8月上旬、丹波杜氏組合の酒造出稼

ぎ者名簿から無作為抽出法により抽出された、今田町を除く、多紀郡全域にわたって分布する酒造出稼ぎに従事する 200 人に対して行なわれた面接調査のうち、酒造出稼ぎの部分のみ使用し、酒造出稼ぎ者の出稼ぎ要因と、酒造出稼ぎが農家におよぼす影響を究明しようと思う。

Ⅱ 丹波酒造出稼ぎの歴史

酒造出稼ぎがなぜ生じたかを、丹波杜氏組合編「丹波杜氏」神戸税務監督局編「灘酒沿革誌」柚木重三著「灘酒経済史研究」西宮市史編集委員会編「西宮市史」を主たる文献にして述べる。元禄年間(1688年～1703年)に江戸積型酒造業として急速に発達した池田、伊丹の酒造家達⁽⁹⁾は、池田、伊丹の近くで酒造労働者を確保していたが、阪神間において、当時綿紡業、油絞りなどの工業が発達し、そのために都市周辺の余剰労働力がこれらの工業に吸収されていったので、伊丹、池田の酒造家達は労働力を山間部から求めるようになってきた。特にこの傾向は天明期(1781年～1788年)に至り、先進酒造地である池田、伊丹の生産高を灘地方が陵駕するようになってから一属強くなつた。これに対して、丹波特に多紀地方では、古くから酒造に従事する技術者が存在し、すでに池田、伊丹地方にも、丹波杜氏の祖先が出稼ぎに出ている関係で地縁、血縁をたよつて、丹波地方に酒造業に従事する労働者を求めるようになってきた⁽¹¹⁾。そして隷属農民から抜け出し独立して行くために、農民は出稼ぎに活路を見出した。労働力の流出がはげしくなつてくると、いきおい藩内あげて奉公人不足と賃金騰貴をきたしたので、地主作付層は、藩を動かして1767年(明和4年)酒造出稼ぎ禁止制度を布く。しかし農民がそれを守らず、30年後の1801年(享和元年)免許状を持つ者のみ酒造出稼ぎを許可した。1802年には新規も許可した。このように、地主手作層とのかつとをくり返しながら、丹波の酒造出稼ぎは年々その数を増していった。灘地方で、これら酒造出稼ぎ者がどの程度大きな比重を占めていたかを見るために、1866年(明治19年)灘の魚崎村において調査された、第1表のごとき資料があるのでこれを参考にする。その当時魚崎村で605人が雇用されており、その内丹波出身者は387人で、全体の63.9%をしめ、また多紀郡出身者は367人で丹波出身者の94.8%を占めている⁽¹²⁾。また、灘酒沿革誌によると「灘五郷の杜氏は殆皆丹波より来り丹波の内にも殆皆多紀郡より来るなり」「今より三四

第1表 明治19年における酒造働人の出身地 (魚崎村における場合)

国別	郡別	頭司	衛頭	酏廻し	道具廻し	釜屋	下働き	合計	比率(%)	
摂津	武庫	2	3	1	2		12	20		
	西宮						2	1		
	菱原	2	1			1	4	8		
	有馬	5	4	6	7	2	38	62		
	川辺				1	1	2	29		
	能勢						1	2	3	
	計	9	8	7	8	5	4	83	123	20.2
播磨	印南						1	1		
	揖東	2	2	1	3	2	1	15	26	
	揖西		2	1				5	8	
	赤穂						1	1		
	加西						1	1		
	飾東						1	1		
	計	2	4	2	3	2	1	24	38	6.3
丹波	多紀	24	23	25	33	28	16	218	367	
	氷上		1	1	1		1	14	18	
	船井							1	1	
	浅茅							1	1	
計	24	24	26	34	28	17	234	387	63.9	
	出石	2	2	1	3	2	3	24	37	
	天田						1	17	18	
	朝来						1		1	
	七美							1	1	
計	2	2	1	3	2	5	42	57	9.5	
	不明						2	2		
	合計	37	38	36	48	37	27	384	605	100.0

(註) 魚崎酒造組合文書より
日本産業史大系 220p より

第2表 酒造出稼ぎ者の出身地および人数分布

	杜 氏	頭	麴 屋	配 屋	釜 屋	精 米	雑 役	その他	計
青 森								70	70
岩 手	294	246	469					1,756	2,765
秋 田	50	30	164					253	497
山 形								90	90
新 潟	1,085		2,103					4,611	7,799
長 野	121	120	53	77	69	78	363	19	900
静 岡	22	7	22	22	22	26	64		185
石 川	215	70	211	211	211	267	389		1,574
福 井	72	39	72	72	72	355	213		895
滋 賀	1		1	1	1	1	3		8
京 都	27	18	29	30	20	19	87	98	828
和 歌 山	1	1	1	1	1	1	9		15
兵 庫	729	508	692	732	384	396	1,776	1,506	6,723
岡 山	328	65	328	327	289	201		2,398	3,936
広 島	282	38	246	221	29	26	479		1,321
山 口	24		24	24	24	48	13		157
鳥 取	90	8	87	81	37	52	263		618
島 根	34	1	34	20	28		30		147
福 岡	157	116	85	29	15	25	544		971
佐 賀	29	29	29	29	23	33	310		482
長 崎	13	9	14	12		7	116		171
香 川	12		12	7		1	43		75
愛 媛	161	10	152	131	62	41	369		926
高 知	28	6	28	27	19	30	141		279
徳 島	2		2			2	12		18
合 計	3,777	1,321	4,658	2,054	1,306	1,609	5,224	10,801	30,950

資料：東京農業大学醸造経営研究調査（昭和34年10月現在）

緑川敬，桜井宏年共著「酒造業の経営と経済」昭和40年 244頁

注：麴屋を大師又は代司ともいう。配屋を上配ともいう。

そして釜屋似下を総称して上人と呼ぶ場合もある。

十年前，丹波の杜氏に酒造の名人多く輩出し今や全く丹波杜氏のみとなれり……⁽¹⁵⁾との記述を見ても，いかに当時丹波特に多紀郡の杜氏が，勢力を持っていたか理解できる。酒造出稼ぎは，昔から，杜氏，頭，代師，配廻し，道具廻し，上人，中人，下人，飯炊き（地方によつて名

称が変わる）等に分れた。杜氏は蔵に入る前に、職能を組織して、出稼ぎ先の酒造場に行く、そのために杜氏と酒造家とは、何代にも渡って雇用契約を結び、主従関係が生じた。⁽¹⁶⁾酒造出稼ぎ者の蔵における職能内容は次のようである。

- (1)杜氏—酒の醸造をおこなう技能者であり職人の長として頭以下の酒造労働者を総括する。
- (2)頭、副杜氏—杜氏の補佐役として蔵人を指揮監督する。
- (3)代師（麴屋、衛門）—製麴の責任者
- (4)甑屋、甑廻し—酒母製造責任者
- (5)道具廻し、二番、流し—諸道具の手入れ、整理をおこなう
- (6)船頭—醪压榨の責任者
- (7)釜屋—蒸米作業の責任者

第3表 職役別所有農地耕地面積の比較

所有農地面積（1965年 8月）								耕作地面積（1965年 8月）							
面積 職役	0反 〳未 5満	5 〳 8	8 〳 10	10 〳 12	12 〳 15	15 反 以上	計	0反 〳未 5満	5 〳 8	8 〳 10	10 〳 12	12 〳 15	15 反 以上	計	
	杜氏 4 4.1	10 10.2	12 12.3	24 14.5	29 29.6	18 18.4	98 100.0	3 3.1	11 11.2	11 11.2	26 26.6	32 32.6	15 15.3	98 100.0	
蔵人	6 8.1	16 21.4	13 17.4	17 22.6	11 14.7	12 16.0	75 100.0	7 9.3	15 20.0	12 16.0	17 22.6	13 17.4	11 14.7	75 100.0	

下段の数字は%

第4表 職役別酒造出稼者の出帯主との続柄

続柄 職役	世帯主	長男	次男	父又は孫	弟	計
杜氏	79 80.6	11 11.2	0 0	7 7.1	1 1.02	98 100.0
蔵人	49 65.3	19 25.3	4 5.3	3 4		75 100.0
計	128 74.0	30 17.4	4 2.3	10 5.8	1 0.6	173 100.0

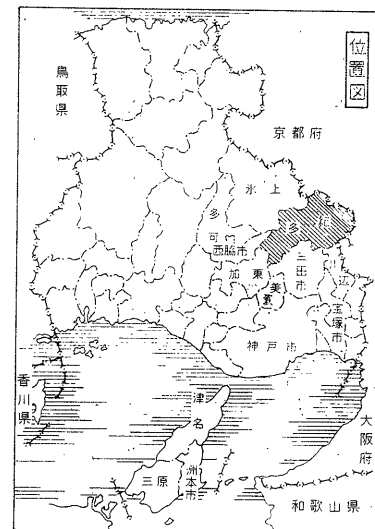
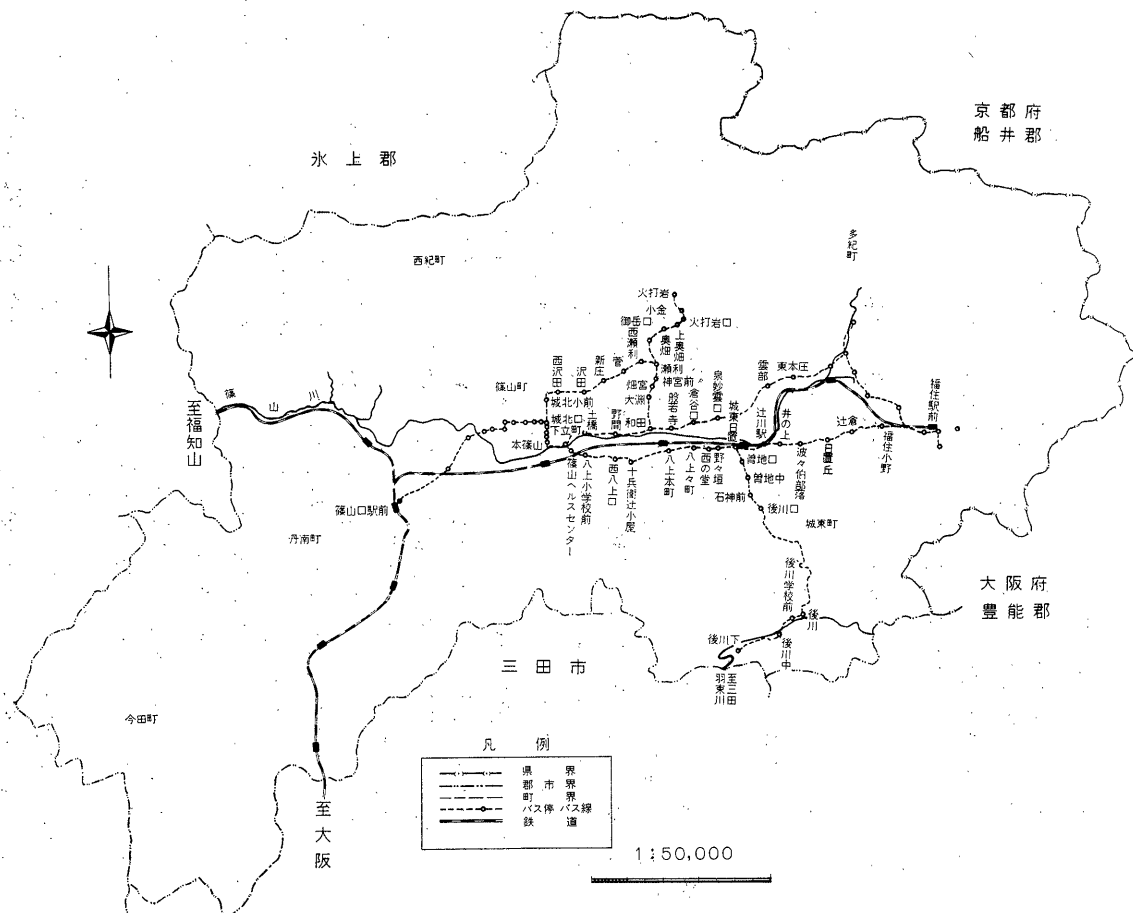
下段の数字は%

第5表 酒造出稼農家（1965年8月）の農業従事者の数と出稼者の続柄

農業従事者数	2				3				4				5	
出続 稼者との 柄	本人と妻	本人と父又は母	本人と長男	計	父又は母	本人と妻と	本人と両親	本人と妻と長男	その他	計	本人と妻と	本人と妻と	両親と次三男	計
農家数	65	2	5 (1)	72	29	9 (4)	1	39	20	9 (3)	2	31	4 (2)	5

() 内は長男で酒造出稼に出ているもの。

第1図 調査地略図



第6表 酒連家の規模と杜氏の年令

年令	39才	40才	50才	60才	70才	計
製成石数						
1,000未満	6	9	4	4		23 23.5
1,000～5,000	3	14	17	4		38 38.8
5,000～20,000	2	10	4	4	1	21 21.4
20,000以上	1	3	6	6		16 16.3
計	12 12.2	36 36.7	31 31.6	18 18.4	1 1.0	98 100.0

下段の数字は%

第7表 蔵人の職種別年令

年令	20才	30才	40才	50才	60才	計
職 種	29才	39	49	59	以上	
頭		5	3	5	2	15 20.0
大 師	4	8	1	2	3	18 24.0
上 酛	2	12	7	4		25 33.3
釜屋道具廻し		2			1	3 4.0
上 人	3	2	4	2	3	14 18.7
計	9 12.0	29 38.7	15 20.0	13 17.3	9 12.0	75 100.0

下段の数字は%

- (8)上人，上働一雑役従事者の中で上役のもの
 (9)中人，中働き一上働きより経験年数の少い雑役従事者，製麴，道具洗い等の助手をする
 (10)下人，下働き一経験年数が少く，単純雑役従事者
 (11)飯炊き一最も出稼ぎ経験の年数がみじかい年少者で，杜氏以下の従業員の食事の世話をするほか，見習いとして下人の作業を補助する。

Ⅲ 調査地および調査対象の概要

多紀郡は，第1図のごとく，兵庫県の東北部にある。そして，その境は，京都府と隣接する。それは，中国山脈の分水嶺に位置し，山が多くその中央部に，盆地状の平野部が広がっている。主な川は，羽束川，篠山川であり，この2つの川が西南に流れている。この地方の気候は，一般に温暖である。篠山町では，一年間の降水日数は，125日（1mm以上）であり，平均温度は13.5度で，最高，34.2度，最低-9.4度と寒暖の差は比較的大きい。⁽¹⁷⁾この郡の中心は篠山町であり，郡全体の人口は昭和40年の国勢調査では47,346人である。交通は篠山町が古くから阪神間の山陰地方に対するかなめであつたために，阪神間との道路は発達している。また，鉄道は単線の福知山線が阪神間に通じており，この鉄道を利用すると阪神間への通勤も可能になつている。次に，この地方の農業の基本的条件と，その特色を1965年度の農業センサス⁽¹⁸⁾により見るために，多紀郡と比較的よく似た地域をとつて比較した。多紀郡では篠山町を，氷上郡では氷上町を例にとつて比較して見た。最初に，地目別面積では（山林を除く），篠山町が全体の89.5%が耕地面積であり，氷上町は91.7%である。特にその中，田の占める割合は，篠山町が93.6%，氷上町は83.2%である。また農家1戸当りの耕地面積は，篠山町0.63町，氷上町0.60町となつている。農業経営規模の特徴は，篠山町では，5段未満が比較的少なく，逆に1町から2町にかけて多い。他方，氷上町では何ら特色は無い。農産物を品目別に見ると，篠山町は著しく米に偏向している。そして酪農，野菜などの副業部門が少い。これに対して，氷上町では，酪農，養鶏，野菜などの商品農産物が発達している。

以上，篠山町と氷上町の農業の概要を比べてみたが，これによると，篠山町では耕作面積で水田の占める率が高く，また著しく農作物が米にかたよつていて，これ以外の作物は余り作られていない。そして1戸当りの耕作面積が比較的広い点に特徴がみられる。

次に，兵庫県の酒造出稼ぎ者が全国の酒造出稼ぎ者の中で占める位置は，酒造季節労働者の出身地および人数分布を表わした，第2表の通りである。酒造出稼ぎ者数は新潟県に次いで2

(19) 番目である。そして兵庫県の酒造出稼ぎ者のうち多紀郡が占める割合は、杜氏では 48.0%，平蔵人では 32.5%を占めている。出稼ぎ者数に対する酒造出稼ぎ者数は、篠山町で約87.4%水上町で約55.6%⁽²⁰⁾であり、篠山町の方がその比率が高い。

次に、調査対象者は、杜氏 98人、平蔵人 75人である。回収率は 86.5%である。調査対象者の地域別分布は、多紀町、杜氏 28人平蔵人 24人、域東町、杜氏 20人平蔵人 19人、丹南町、杜氏 15人平蔵人 12人、西紀町、杜氏 8人平蔵人 6人、篠山町、杜氏 27人平蔵人 14人となつている。

調査対象者の所有面積および耕作面積は、第 3 表の通りである。これによると、杜氏の所有地は、10反から15反にかけて多く、平蔵人は 5 反から12反にかけて多い。耕作面積でも同じ傾向がみられる。世帯主と出稼ぎ者の続柄は第 4 表の如くである。すなわち、杜氏では世帯主が 80.6%と多く、平蔵人では世帯主65.5%，長男25.3%，次三男 5.3%となつている。酒造出稼ぎ農家の農業従事者数と出稼ぎ者の続柄を表わした第 5 表では、農業従事者数 2 人が全体の 5 割近くを占め、そのうち本人と妻が 90.3%を占めている。酒造家の規模と杜氏の年令を示した第 6 表では、1,000石から5,000石が全体の38.8%，年令では40才から49才までが全体の36.7%を占め最も多い。蔵人の職種別年令を示した第 7 表では、30才から39才までが 38.7%で最も多い。

Ⅳ 酒造出稼ぎ者の出稼ぎ要因の分析

以上、酒造出稼ぎの最近の傾向、出稼ぎの生じた歴史的な理由、酒造業の展望、一般産業の中での酒造業の位置などを概観した。次に現在この酒造出稼ぎが、どのような要因によつて行

なわれているかを、このたびの丹波地方での酒造出稼ぎ者の実態調査の結果をもとにして究明してみよう。

現在酒造出稼ぎをしている農家で何らかの⁽²¹⁾職業に従事している長男のいる農家のみに限定して長男が農業をするものと、農業をしないものとに分けて、長男が農業をする要因を検出した。そして、農業をする長男が酒造出稼ぎに出るのは、どうしてかを、分析してみた。

1 酒造出稼ぎ農家の長男の職業選択の要因

農家の長男が農業に従事しているかいないかは、その家の耕作面積の大小と、関連あると考えられるので、農家の耕作面積(調査回答により分類した。以後用いる耕作面積はこれである)を10反未満、10反から12反、12反以上と3通りに分けてみると、その結果は第 8 表の通りである。これによると、長男が農業をする場合、家の耕作面積が12反以上である場合が多く、また逆に長男が非農の場合、10反未満が多く、家の耕作面積と長男の職業選択には一貫した関連が見られる。これは 1 %の水

第 8 表 長男の職業と家の耕作面積

長男の職業 \ 耕地面積	10反未満	10～12	12反以上	計
農 業	5 18.5	8 29.6	14 51.8	27 100.0
非 農	13 59.1	6 27.3	3 13.6	22 100.0
計	18 36.7	14 28.6	17 34.7	49 100.0

P<0.01 下段の数字は%

第 9 表 長男の職業と父(酒造出稼者)の農業技術改良態度

長男の職業 \ 父の農業改良態度	最先端 先端型	追、慎重 保守型	計
農 業	8 61.5	5 38.5	13 100.0
非 業	3 27.3	8 72.7	11 100.0
計	11 45.8	13 54.2	24 100.0

P<.01 農業改良態度の無回答を除く
下段の数字は%

第10表 長男の職業と父（酒造出稼者）
の酒造労働における職役

長男の職業 \ 父の職役	父の職役		計
	杜 氏	平蔵人	
農 業	22 81.5	5 18.5	27 100.0
非 農	16 72.7	6 27.3	22 100.0
計	38 77.6	11 22.4	49 100.0

$P < 0.05$ 下段の数字は%

第11表 酒造出稼者の職役と耕地面積

職 役 \ 耕地面積	耕地面積		計
	10 反 未 満	10 反 以 上	
杜 氏	10 26.3	28 73.7	38 100.0
平 蔵 人	8 72.7	3 27.3	11 100.0
計	18 36.7	31 63.27	49 100.0

$P < 0.01$ 下段の数字は%

第12表 家の耕作面積別長男の職業と父
（酒造出稼者）の職役

耕地面積 父の職役 長男の職業	12反未満		12反以上		計
	杜氏	平蔵人	杜氏	平蔵人	
農 業	10 42.5	3 33.3	12 80.0	2 100.0	27
非 農	13 57.5	6 66.7	3 20.0	0 0	22
計	23 100.0	9 100.0	15 100.0	2 100.0	49 100.0

下段の数字は%

第13表 農業従事の長男の酒造出稼と家の耕作面積

長男の酒造出稼 \ 耕作面積	耕作面積		計
	12反未満	12反以上	
酒造出稼に行く	6 60	4 40	10 100.0
行かない	7 41.2	10 58.8	17 100.0
計	13 48.1	14 51.9	27 100.0

下段の数字は%

準で統計的に有意性がある。従つて、長男の職業選択を規定する要因の1つとして家の耕作面積の大小が考えられる。

次に、農業技術改良に対する父（調査の対象者である、酒造出稼者のうち職業を持つ長男のいる農業経営主。以後用いる父はこの意味である）の態度は長男の農業に対する考え方に影響すると考えられるので、父の農業技術改良に対する程度を、次の7つに分類して

- (1) 自分から新しい農業技術を知ろうとし、よく理屈を研究し理解して、他の人々に先んじてやつてみる、最先端型
- (2) 新しい農業技術のことを聞いて、結果がよいと思われる時には、人より先にやつてみる、先端型
- (3) 自分から進んで新しい農業技術を知ったり、試みようとはしないが、他の人々がやつてみて、成績がよいと自分もやる、追従型
- (4) 長年の間自分で工夫して、やつてきた経験に自信があるので、すぐには新しい農業技術にとびつかない、慎重型
- (5) 自分が今までやつてきたやり方が何となくよく、これに執着を感じるので、新しい農業技術をすぐやつてみる気になれない、保守型
- (6) 新しい農業技術にとびつく人には何となくよい感じがしないので、初めはやつてみる気になれない、反撥型
- (7) 新しい農業技術には興味がなく、やつてみる気もない、無関心型

これと長男の職業選択との関係をみた。その結果が第9表である。これによると、長男が農業をする場合、父の農業技術改良に対する態度が先進的であるものが多く、逆に長男が非農の場合、父の態度が保守的であるものが多いといつた、統計的有意性はない、けれども一応の関連が見られる。

今1つの問題である、父の酒造労働での職役と長男の職業選択との関連の有無は、第10表のごとく5%の水準で有意性のあることが認められる。ところが、第11表のごとく酒造

第14表 農業従事の長男の酒造出稼と父
(酒造出稼者)の酒造技術改良態度

父の酒造改良態度 長男の酒造出稼	最先端・先端 追型	慎重・無 関心型	計
酒造出稼に行く	10 100	0	10 100.0
行かない	10 58.8	7 41.2	17 100.0
計	20 74.1	7 25.9	27 100

P<0.01 下段の数字は%

第15表 農業従事の長男の酒造出稼と父
(酒造出稼者)の農業技術改良態度

父の農業改良態度 長男の酒造出稼	最先端・ 先端型	追重・慎 重・反型	計
酒造出稼に行く	4 57	3 43	7 100.0
行かない	4 67	2 33	3 100.0
計	8 61.5	5 38.5	13 100.0

農業技術改良態度の無回答を省く
下段の数字は%

第16表 農業従事の長男の酒造出稼と父
(酒造出稼者)の酒造労働における職役

父の職役 長男の酒造出稼	杜氏	平蔵人	計
酒造出稼に行く	9 90	1 10	10 100.0
行かない	14 82.4	3 17.6	17 100.0
計	2322 85.2	54 14.8	27 100.0

下段の数字は%

出稼ぎ者の職位と、耕作面積との間には、1%の水準で統計的に有意性のある関連が検証されてもいる。前述したごとく長男の職業と家の耕作面積との、間にも統計的に有意性のある関連が認められている。それゆえ、酒造出稼ぎ農家の長男の職業選択の真の要因は、その家の耕作地面積の大小であり、そして父の職位はみせかけの要因にすぎないのではないかという疑問が生じる。そこで、これを検証するために、第12表の如く耕地面積を制御して、長男の職業と父の酒造労働での職役との関連をみた。その結果は、父の職役の如何と、長男の職業との間にはほとんど関係がない、のみならず、12反以上の場合、予想に反して平蔵人の長男の方が、若干農業を選ぶ者が多いという傾向さえみられる。従つて、長男の職業選択と父の酒造労働での職位とは、実際に関連するとはいえず、むしろ耕地面積の大小が長男の職業選択と関連し、父の酒造労働での職役と耕地面積の大小とが、関連するに過ぎない。それゆえに酒造出稼ぎ農家の長男が農業をするか、どうかを規定する要因として、実際に作用しているのは、(1)家の耕作面積の大小、(2)農業技術改良に対する父親の態度であると推測される。

2 農業に従事する長男の酒造出稼ぎの要因

以上で、酒造出稼ぎ農家の長男の職業選択の要因が判明した。次に、これら農業に従事する者で、ある人は酒造出稼ぎに出、ある人はなぜ酒造出稼ぎに出ないのかを規定する要因を究明してみた。

最初に、家の耕作面積と長男の酒造出稼ぎとの関連をみると、第13表の如く、長男が酒造出稼ぎに行く場合、耕作面積は12反未満が若干多く、長男が酒造出稼ぎに行かない場合、12反以上が若干多いことが判明した。これは、前述の如く、長男が農業を選ぶ場合、家の耕作面積が1町以上あるものが多い。しかし、耕作面積が、1町2反以上になると、農業に人手を必要とすることが多く、また農業による収入も多いと思われるので、酒造出稼ぎに出る必要が少なくなるのではないかと推測される。

前節で述べたところと合せ考えると、酒造出稼ぎ農家は概ね、農閑期以外は、農業を主たる生業とするに足るだけの経営規模であり、他方また農業以外の季節労働に従う余裕がない程の

第17表 農業従事の長男の酒造出稼と父
(酒造出稼者)の酒造りに対する態度
(酒造りは楽しいと思うかの間に対する回答)

長男の 酒造出稼	父の酒造りに 対する態度	楽しい 何とも いえない	楽しく ない	計
酒造出稼に行く		7 70	3 30	10 100.0
行かない		8 47	9 52.9	17 100.0
計		15 55.5	12 44.4	27 100.0

下段の数字は%

予想される如く、むしろ逆にさえなっている。⁽²³⁾ また、統計的有意性には達しないが、第16表の如く、父が杜氏である場合、父が平蔵人であるものに比べて、酒造出稼ぎに出る長男が一層多いという関連が見出される。

今1つの問題である長男の酒造出稼ぎと父の酒造出稼ぎに対する態度との関連は第17表の通りである。長男が酒造出稼ぎに行く場合、父が酒造出稼ぎを楽しい、あるいは何ともいえないといっているものが多い反面、長男が酒造出稼ぎに出ない場合、父が酒造出稼ぎを楽しくしないと思っているものが多いという、一応の関連が見られる。以上のことを要約すると、酒造出稼ぎ農家の長男の酒造出稼ぎ要因の主たるものは、(1)家の耕作面積の大小、(2)父の酒造技術改良に対する態度、(3)父の酒造出稼に対する態度であると推測される。

V 酒造出稼ぎの農家におよぼす影響

ここでは、酒造出稼ぎが農家におよぼす影響のうち、杜氏と平蔵人との賃金差が農家にどのような影響を与えるかということを問題にした。

有効調査対象者173人の中で昭和15年以前から酒造出稼ぎに出ている人だけを抽出して分析の対象とした。昭和15年以前に限定したのは、酒造労働において、大体経験年数が25年前後で平蔵人から杜氏に昇進しているため、この時点を標準にすれば、杜氏になった人と、そうでない人との賃金差が、それぞれの農村生活に与える影響を、かなり明白に捕えることができると考えたからである。

最初に酒造出稼ぎ者の所有農地および、耕作面積を、最初の出稼ぎ時、農地改革時、現在(昭和40年度)と分けて比較した。大まかであるが、所有農地、および耕作地面積を1町未満、1町以上(調査対象者の回答により)とに分けて、変動をみた。その結果が第18表、第19表である。これによると、所有農地では、平蔵人は最初の出稼ぎ時、農地改革時、現在に至るまで、1町以上と1町未満との間の比率にはあまり変動が見られなく、かえって農地改革時では、1町未満の比率がふえている。これに対して杜氏は、最初の出稼ぎ時、農地改革時、現在を通じて、1町以上の比率が一貫してふえている。これは耕地面積の変動についても、ほぼ同じことがいえる。この耕作地および、所有農地の変動の傾向は、総ての杜氏についてあてはまるものではなく、最初の出稼ぎ時に、零細農家であつたものについてのみ、あてはまるものであると考えられる。すなわち、最初の出稼ぎ時において、すでに耕作面積および所有農地がかなりある農家では、耕作するにも限度があり、また農業収入もかなりあるために、土地購入に対する意欲

規模でもない。約言すれば、酒造出稼ぎに出る農家は、中規模の農家である。

父の酒造技術改良に対する態度は、長男の酒造出稼ぎに影響を与えられられるので、父の酒造技術改良に対する態度を、農業技術改良に対する態度と同じく7つに分類して、これと長男の酒造出稼ぎとの関係をみた。その結果が第14表である。これによると長男の酒造出稼ぎと父の酒造技術改良に対する態度との間には、1%の水準で有意性のある関連が認められている。しかし第15表の如く、父の農業技術改良に対する態度と長男の酒造出稼ぎの間には、ほとんど関係なく、

第18表 所有農地面積の変動

職役	年次	農地面積		
		1町未満	1町以上	計
杜氏	最初の酒造出稼時	32 56.1	25 43.9	57
	農地改革時	22 38.6	35 61.4	57
	現在 (1965)	16 28.1	41 71.9	57
蔵人	最初の酒造出稼時	11 52.4	10 47.6	21
	農地改革時	12 57.1	9 42.9	21
	現在 (1965)	10 47.6	11 52.4	21
総数	最初の酒造出稼時	43	35	78
	農地改革時	34	44	78
	現在 (1965)	26	52	78

下段の数字は%

第19表 耕作面積の変動

職役	年次	耕作面積		
		1町未満	1町以上	計
杜氏	最初の酒造出稼時 (1940以前)	25 (43.9)	32 (56.1)	57
	農地改革時 (1947)	16 (28.1)	41 (71.9)	57
	現在 (1965)	16 (28.1)	41 (11.9)	57
蔵人	最初の酒造出稼時	8 (38.1)	13 (61.9)	21
	農地改革時	12 (57.1)	9 (42.9)	21
	現在 (1965)	8 (38.1)	13 (61.9)	21
総数	最初の酒造出稼時	33	45	78
	農地改革時	28	50	78
	現在 (1965)	24	54	78

() 内の数字は%

第20表 所有農地の最初の出稼時 1940年(昭和15年以前)と農地改革時1947年との比較

職役	面積 増減	最初の出稼時の所有農地						総数		
		1町未満			1町以上					
		増加	同じ	減少	増加	同じ	減少	増加	同じ	減少
杜氏		14 43.8	14 43.8	4 12.4	4 16.0	16 64.0	5 20.0	18 31.6	30 52.7	9 15.7
蔵人		2 18.2	7 63.6	2 18.2	3 30	5 50	2 20	5 23.8	12 57.2	4 19.1

<備考>回答不完全なものは除外した

下段の数字は%

第21表 所有農地・耕作地面積の農地改革当時と現在の比較

職役	農地面積 増減	農地改革当時の所有農地						総数			農地改革当時の耕作地						総数		
		1町未満			1町以上						1町未満			1町以上					
		増加	同じ	減少	増加	同じ	減少	増加	同じ	減少	増加	同じ	減少	増加	同じ	減少	増加	同じ	減少
杜氏		23 63.9	10 27.8	3 8.3	11 17.7	35 56.5	16 25.8	34 34.9	45 45.9	19 19.4	15 55.5	10 37.1	2 7.4	11 15.4	42 59.2	18 25.4	26 26.6	52 53.1	20 20.4
蔵人		11 28.8	23 60.6	4 10.5	3 8.1	23 62.2	11 29.8	14 18.7	46 61.3	15 20.0	7 20.6	24 70.6	3 8.8	7 17.1	23 56.2	11 26.8	14 18.7	47 62.6	14 18.7

下段の数字は%

第22表 自小作関係についての最初の酒造出稼時（1940年以前）と農地改革時（1947年）との比較

職 役	最初の出稼時の 自小作関係	自小作又は小小作 (所有耕地が耕作地 より小なるもの)			自 作 (再者が 同じもの)			自作兼地主 (所有土地が耕作地 よりも大なるもの)			計
	農地改革時 の自小作関係	自小作 又は小作	自作	自作兼地主	自小作 又は小作	自作	自作兼地主	自小作 又は小作	自作	自作兼地主	
杜 氏		6	8	1	2	35	3	—	1	1	57
蔵 人		1	3	—	2	13	1	—	—	1	21

第23表 職役別酒造出稼収入（昭和40(1965)年度）

職 役	収 入	10 万円 未満	10 〃 20	20 〃 30	30 〃 40	40 〃 50	50 〃 60	60 〃 70	70 〃 80	80 万円 以上	舞 回 答	計
杜 氏		—	1 1.8	14 24.6	19 33.4	12 21.0	4 7.0	4 7.0	—	2 3.6	1 1.8	57 100.0
蔵 人		1 4.8	9 42.9	9 42.9	2 9.4	—	—	—	—	—	—	21 100.0

下残の数字は%

第24表 職役別耐久消費財農業機械所有状況

品目 職役	扇 風 機	電 氣 釜 （ガ ス）	電 氣 冷 蔵 庫	ト ー ス タ ー	自 動 車	動 力 耕 転 機	普 及 率（％）						サ ン プ ル 数
							扇 風 機	電 氣 釜 （ガ ス）	電 氣 冷 蔵 庫	ト ー ス タ ー	自 動 車	動 力 耕 転 機	
杜 氏	40	35	37	12	13	46	70.1	61.4	64.9	21.0	22.9	80.7	57
蔵 人	7	13	11	1	5	14	33.3	61.9	52.3	4.7	23.8	66.6	21

第25表 職役別村における役職

職 役	村の役職		
	役職あり	な し	計
杜 氏	24 42.1	33 57.9	57 100.0
蔵 人	5 23.8	16 76.2	21 100.0

下段の数字は%

第26表 職役別学歴

職 役	学 歴			計
	小 学	高等小学	旧 中	
杜 氏	5 8.8	48 84.2	4 7.0	57 100.0
蔵 人	2 9.5	17 81.0	2 9.5	21 100.0

下段の数字は%

が少ないが、耕作面積および所有農地の少ない零細農家では、土地拡大に対する意欲が旺盛であるために、最初平蔵人であつたものが経験を積み、杜氏になり、出稼ぎ収入が激増したために、生活に余裕が生じ、土地を購入して所有地をふやしてきた。しかし、平蔵人の場合杜氏に比べてそれほど出稼収入が多くないために土地を購入し、所有地をふやすことができなかったため、上述の如き結果になつたものと推測される。この推測を検証するために、所有農地およ

び耕作地を1町以上、1町未満とに制御してその増減を調べた。最初の出稼ぎ時と農地改革時との所有農地の増減は、第20表の通りである。これによると、最初の出稼ぎ時の所有農地が、1町未満の場合、杜氏は増加が著しく、そして平蔵人も若干増加している。1町以上では杜氏、平蔵人ともに減少する傾向がある。このことは、所有農地と耕作地面積の農地改革時と現在との比較を示した、第21表についてもほぼ同じことがいえる。次に、最初の酒造出稼ぎ時と、農地改革時との自作、小作関係を見ると、第22表の通りである。これによると、杜氏が平

蔵人よりも小作から自作、自作から自作兼地主への昇進率が高い。従つて、前で推測した如く、最初の出稼ぎ時にその家の所有農地、耕作面積が1町未満であつた杜氏は、一貫してその所有農地および耕作面積を増加させてきているのに対して、1町以上の場合では所有農地および耕作面積ともに減少する傾向が

第27表 職役別勤続状況

勤続状況 職 役	同じ酒造家 で働いた	酒造家 が変わった	計
杜 氏	3 5.3	54 94.8	57
蔵 人	1 4.8	20 95.3	21

第28表 職役別昇進の目安についての見方

昇進の目安 職 役	経験年数	熟練上達度	勤続年数	仲間での 評価	先輩のひき	技術知識 の研修	計
杜 氏	14 12.3	21 18.4	21 18.4	8 7.0	28 24.4	22 19.3	114 100.0
蔵 人	7 16.7	11 26.1	11 26.1	1 2.4	4 9.5	8 19.0	42 100.0
総 数	21 13.5	32 20.5	32 20.5	9 5.8	32 20.5	30 19.2	156 100.0

不段の数字は%

第29表 地或別杜氏昇進状況〔最初の酒造出稼が昭和15年(1940年)以前であるものの現在の職役(1965年)〕

職 役 地 域	杜 氏	蔵 人							計	杜 氏 昇進率%
		頭	大 師	酓	道具廻	上 人	小 計			
篠 山	17	1	1			1	3	20	85.0	
多 紀	21	3	2	3	1	1	10	31	67.7	
城 東	19	1	1	4	1	—	7	26	73.3	
丹 南	7	1	—	—	—	2	3	10	70.0	
西 紀	6	1	—	—	—	—	1	7	85.7	

第30表 職役別酒技術改良に対する態度

態度型 職 役	最先端	実 行	追 随	慎 重	保 守	反 撥	無関心	計
杜 氏	7 (12.3)	23 (40.4)	12 (21.1)	12 (12.1)	3 (5.3)	—	—	57 (100.0)
蔵 人	3 (14.3)	7 (33.4)	5 (23.8)	3 (14.3)	2 (9.5)	—	1 (4.8)	21 (100.0)

下段の()内の数字は%

あり、前記の推測を裏づけている。

最初に、杜氏と、平蔵人との賃金差を推定して論をすすめたが、それでは、実際のところ、この賃金差はどの程度かを調査結果より見ると、それは第23表の如くである。杜氏では、78%の人が20万円から50万円台であるのに対し、平蔵人は、85.5%の人が10万円から30万円台である。次に今回の調査より得られた結果だけにより、上述以外の、杜氏と平蔵人の賃金差が、農家におよぼす影響を見てみよう。最初に第24表で見られる如く杜氏と、平蔵人との耐久消費財および農業機械の所有状況が自動車を除いたものについては、一貫して杜氏の方が高く、生活程度の高いことが推定される。そして、平蔵人と杜氏との所有農地の差は、農村社会における地位の差を生み、第25表のごとく、杜氏の方が村の役職につく機会も多くなる。また、杜氏が自分の出身地から下働き手を多数蔵に連れて行くということも、おのずとその土地での地位を高めるようになる⁽²⁴⁾。一方、同郷関係や親戚関係が蔵の中に持込まれ、また、逆に蔵での役職

関係が村の生活にまで持込まれ、かように酒造出稼ぎでは、酒造労働での職位の上下と農村における関係とが同一視され、相互に影響し合っている。

それでは、何故ある人は杜氏になりある人はならないのかを考察してみよう。学歴差は第26表の通りであり杜氏と蔵人との間には差がない。第27表の勤続状況も差がない。しか

第31表 職役別部落慣行に対する態度

態度 役職	得点
杜氏	2.53
蔵人	2.84

得点の高い方が保守的である。

し、昇進の目安を示した第28表において、杜氏は先輩のひきが多いことが判明した。また第29表の如く地域により杜氏の昇進率が異なっている。すなわち、篠山町(丹波杜氏組合長出身地)では昇進率が85.0%であるのに対し、西紀町では67.7%となっている。次に杜氏自身の問題で、酒造技術改良に対する態度により差は見られないだろうか。これを見たのが第30表である。最先端、実行、慎重を進歩的態度とし他を保守的態度とすると、杜氏の方が酒造技術改良に対して進歩的な人の割合が若干高い。次に、農村の慣習に対する態度では、第31表の如くであり、杜氏より平蔵人の方が保守的である。従つて、杜氏への昇進は先輩のひきと地縁によるといえる一方、また杜氏になっている人には、平蔵人に比べて酒造技術改良や部落慣行に対する態度の進歩的である者が若干多いといえるようである。なお、近年酒造出稼ぎ日数が長くなつたという事が本調査によつて得られた注目される結果の1つである。すなわち、限られた生産設備と労働力によつて酒の需要増加に応ずるために、操業日数の延長に対応して、近年出稼ぎ日数が従前の100日前後から150日から180日と長くなつたことが判明したが、その詳細については、紙数の関係上別稿にゆずることとする。

本小論を草するに当たり、数々の懇切なる御指導を戴いた、甲南大学教授井森陸平先生、現地調査を心より承諾して下さつた丹波杜氏組合長畑栄一氏、現地調査にさいして御協力下さつた甲南大学教授増田光吉先生、関西大学助教授西山美瑛子先生および甲南大学、神戸女学院大学の学生諸君に心から感謝の意を表する。また、本調査に当り種々の御力添えいただいた丹波杜氏組合員の皆様にも深甚の感謝の意を表する。

- (1) 京都府労働研究所「出稼ぎの現状と農家経済」昭和40年 4頁
- (2) 美土路達雄著「出稼ぎ」昭和40年 29頁
- (3) 同 上 22~32頁
- (4) 同 上 41頁
- (5) 緑川敬、桜井宏年著「清酒業の経営と経済」昭和40年 44~46頁
- (6) 醸界タイムス編「日本醸造家名鑑」昭和42年

第32表 職役別耕作面積別酒造出稼者の酒造出稼収入以外の収入

職 役	耕作 面 積	酒造出稼 以外の 収入		19 万円	20 ～ 29	30 ～ 39	40 ～ 49	50 ～ 59	60 ～ 69	70 ～ 79	80 ～ 89	90 ～ 99	100 ～	不 詳	計
杜 氏	5反未満			1			1	1							3 3.1
	5～ 8未			4	2	1	1		1	1			1		11 11.2
	8～10未			2	2	7		2							13 13.3
	10～12未			3	1	5	3	6	2		2		2		24 24.5
	12～15未			1	1	5	5	8	7	1	2				30 30.6
	15～				2	2	2	4			6		1		17 17.3
	計			11 11.2	8 8.2	20 20.4	12 12.2	21 21.4	10 10.2	2 2.0	10 10.2	0 0	4 4.2	0 0	98 100.0
平 蔵 人	5反未満			3	2					1				2	8 10.7
	5～ 8未			3	5	3	2								13 17.3
	8～10未			4	5	1	2							1	13 17.3
	10～12未			3	1	3	1	1	1		3				13 17.3
	12～15未			1	2	4	3	1		2				1	14 18.7
	15～			1		3	1	3	3		2			1	14 18.7
	計			15 20.0	15 20.0	14 18.7	9 12.0	5 6.7	4 5.3	3 4.0	5 6.7	0 0	0 0	5 6.7	75 100.0

下段の数字は%

第33表 酒造出稼収入とそれ以外の収入（杜氏）＜1965年酒造年度分＞

出稼収入	出稼以外の収入		0 ～ 9 万円	10 ～ 19	20 ～ 29	30 ～ 39	40 ～ 49	50 ～ 59	60 ～ 69	70 ～ 79	80 ～ 89	90 ～ 99	100 ～	不 詳	計
0～ 9万円															0
10～19			1			1	1				1				4 4.18
20～29			1	2	7	6		6	1	1			1		25 25.5
30～39				3	1	5	5	6	3		1	2		3	29 29.6
40～49				2	1	5	4	1	3	1	2		2	1	22 22.4
50～59							1	3	2	1	1			1	9 9.2
60～69				1		1	1	1						1	5 5.1
70～79								1							1 1.0
80～89						1									1 1.0
90～99															0 0
100～															1 1.0
不詳														1	1 1.0
計			2 2	9 9.2	9 9.2	19 19.4	12 12.2	18 18.4	9 9.2	3 3.1	5 5.1	2 2.1	3 3.1	7 7.1	98 100.0

下段の数字は%

第34表 酒造出稼収入とそれ以外の収入（平蔵人）＜1965年酒造年度分＞

出稼以外の収入 出稼収入	0 ～ 9 万円	10 ～ 19	20 ～ 29	30 ～ 39	40 ～ 49	50 ～ 59	60 ～ 69	70 ～ 79	80 ～ 89	90 ～ 99	100 ～	不 詳	計	
0～9万円	1		2	1								1	5	6.6
10～19	1	5	6	7	3		1	2	2		1	2	30	40.0
20～29	3	5	7	6	6	2	2				3		34	45.4
30～39						3						1	4	5.4
40～49									1				1	1.3
不詳												1	1	1.3
計	5 6.6	10 13.3	15 20.0	14 18.7	9 12.0	5 6.6	3 4.0	2 2.6	3 4.0	0 0	4 5.4	5 6.6	75	100%

- 桜井宏年著「高度成長下の日本経済における清酒醸造業」昭和35年 46頁
- (7) 美土路達雄 上掲書 44頁
- (8) 二宮哲雄，光川晴之，越智昇編著「社会学への招待」昭和43年 113～114頁
- (9) 神戸税務監督局編「灘酒沿革誌」明治40年 140～146頁
- (10) 地方史研究協議会編「日本産業史大系」第6巻 昭和35年 133～134頁，223頁
丹波杜氏組合編「丹波杜氏」昭和32年 95頁
- (11) 柚木重三著「灘酒経済史研究」昭和15年 14～15頁
- (12) 丹波杜氏組合 上掲書 93～95頁
- (13) 同上 124頁
- (14) 西宮市史編集委員会編「西宮市史」昭和40年第2巻 526～530頁
地方史研究協議会 上掲書 220頁
- (15) 神戸税務監督局 上掲書 336頁
- (16) 緑川敬，桜井宏年 上掲書 35～36頁
- (17) 神戸海洋气象台調査資料による。
- (18) 農林省統計局編「農業センサス」1965年第28巻 552～586頁
兵庫県企画統計課編「兵庫統計書」昭和42年 8頁
- (19) 緑川敬，桜井宏年 上掲書 244頁
- (20) 柏原職業安定所調査資料による。
- (21) ここでいう長男は出生の順位だけでなくあとつぎを総称していつている。以後用いる長男はすべてこの意味である。
- (22) かりに出稼ぎ者について見ても第32表の如く，杜氏でも杜氏以外の人でもその耕地面積が多い程，出稼収入以外の収入，主に農業収入が多くなっているからである。
- (23) なお，酒造および農業技術改良態度と職位についての関連を調査資料から推定すると，第33表，第34表の如く酒造出稼収入以外の収入，主として農業収入の出稼収入より多いものの割合は，平蔵人が杜氏に比べて多く，農業依存度の高いことが推定され

第35表 職役別酒造技術改良態度と農業技術改良態度の要約

職役	農業態度		最先端 先 端	追・慎重・保守・無関	計
	酒造態度				
杜氏	最先端・先端		20 60.6	13 39.4	33 100.0
	追・慎重・保守・無関心		8 36.6	14 63.4	22 100.0
	計		28 50.9	27 49.1	55 100.0
平蔵人	最先端・先端		10 77	3 23	13 100.0
	追・慎重・保守・無関心		11 52.4	10 47.6	21 100.0
	計		21 61.7	13 38.2	34 100.0

下段の数字は%

る。これに対応して改良態度においては、第35表の如く、農業技術改良に対して意欲的で酒造技術改良に対して意欲的でないものが杜氏より平蔵人に多いことが判明している。

- ㉔ 杜氏とそれ以外の下働きとでは、村人から与えられる尊敬と威信の程度には大きな違いがあるといえる。
- ㉕ 伏見のA酒造会社のある蔵では、3役（杜氏、頭、代司）全部が親戚または同郷の人で占められている事例もあることが、本研究組織の他の分担者により見出されている。

